黒川　泰孝

建築設計製図Ⅰ

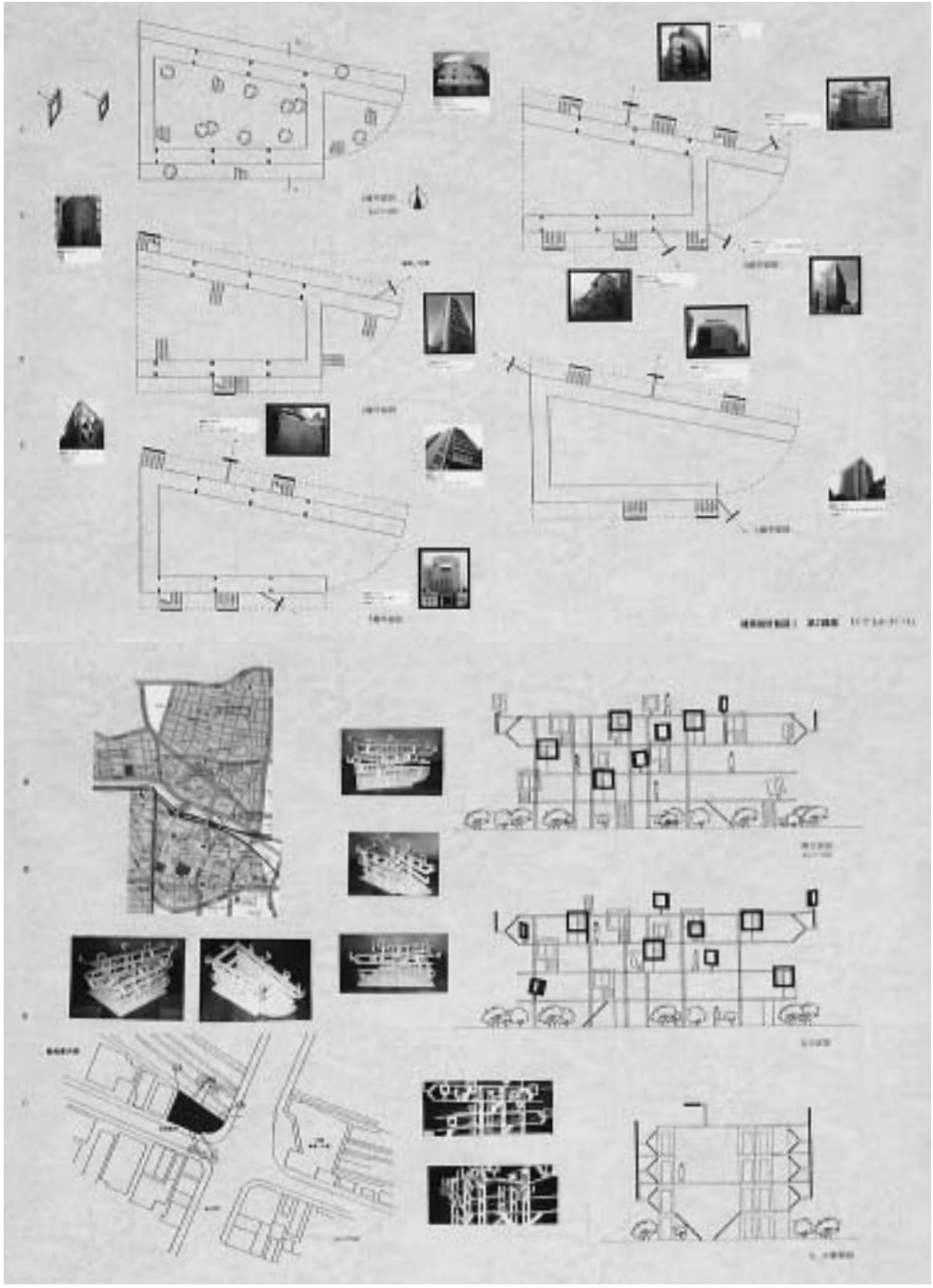
第２課題
パブリック・スペース

２年２組

担当＝
宇杉　和夫
石田　道孝
本杉　省三
川口　とし子
高　俊民
白江　龍三
山崎　敬三

黒川　泰孝
情報都市東京／そこを取り巻く広大なネット／彼らはこのPILLERをその／INTERFACEとしている

指導＝高　俊民
このテーマについてはおそらく様々な解釈があると思うが、黒川君が簡明な調査、分析を基に



奴留由　歩

案をまとめたプランニング・プロセスをまず評価したい。この直前の設計課題では住宅建築を固有かつ独立したソリューションとしてデザインを考えがちであったが、このテーマが意図とする公共性のある空間の創造を的確に表現した代表的な案と言えよう。狭い埋もれたような計画地にもかかわらず、２年生の彼は歴史的また現在の地域的文脈などを相対的に認識し、さらに歩行者の種別と動き、役所の働きなどを考慮したうえでアーバンデザイン的なアプローチを試みた。すなわち、都市空間を必ずヒストリカル、リージョナル・コンテクストを背景にコンセプトを構築するという考え方を示している。

以上のプロセスを簡潔に経て、黒川君が提案したパブリック・スペースは「ピラー」（柱）のインスタレーションで形成された「インターフェイス」、その奥と下に配置されたカフェーやミュージアムで構成されている。ピラーの群はマクロスケールでは象徴的なステートメントであるが、実際には情報を収集する装置でもある。また、カフェ上に隣接するビルの側面を隠す役目も果たす複数のパネルは、外へ情報を発信する「ワイドヴィジョン」のスクリーンとしても機能する。このコンセプトは、シンボリズムとファンクショナリティーの両面を備えている。

古来の都市空間を理解し、街の一角に、彼曰く「サロン・アゴラ的空間」を引用・提案したことは、現代／近未来に向かって興味深い。

奴留由　歩

額入りの建築（風景）画。

御茶ノ水には、全国から見学に来る建築作品（ニコライ堂、センチュリータワーなど）があるにもかかわらず普段見過ごされている。

そこでそのような建築を額縁で形取り、人々に建築の素晴らしさに目を向けてもらおうと試みた。

ここを訪れる者は、建築を観ていると同時に、彼・彼女達もまた縁取られ、通行人から見られている。

「みる↔みられる　関係」（←人間の欲望）が成立している。

指導＝本杉　省三

建築を見る建築

学生の多くが都市を否定的に見ているということにはがっかりする。都市が有する雑多な魅力に最も敏感に反応する者こそ若者の普通の姿ではないのか？木や水を安易に導入するのでなく、それらを大切にするからこそ都市を考えなければならないのではと話しながら進めた。

奴留由君の案は、この付近にある優れた建築に着目して、それらを覗き見る物見台を造形化した単純な発想ものである。その単純な構想が、都市の雑踏の中でこの場所を浮かび上がらせ、彼が語ったように、場所・建築・人など都市を成立させている様相を相互に、しかもそれらを立体的に関係付けている点で十分に都市的であり、この場所を一層楽しくさせてくれるように思う。周囲の建物が高くなったりすると、実際には当初の意図とはズレたものとなってしまうが、この主旨には生き続けられるだけの魅力があるだろう。物見台としてだけでなく、どんな風に若者がこれを利用するのか期待できるのもおもしろい。